

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

編みと織りの痕跡：
北海道とその周辺地域における南からの文化と北からの文化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉本, 忍 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5197

編みと織りの痕跡

—北海道とその周辺地域における南からの文化と北からの文化—

国立民族学博物館教授

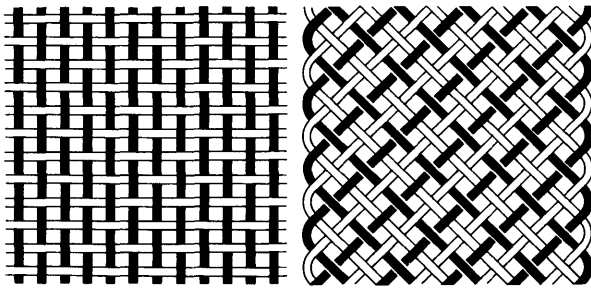
吉本 忍

1. 編物と織物

編物をつくるための編みの技術と、織物をつくるための織りの技術は、ともに人類が新石器時代に獲得した主要な生活技術のうちに数えられる。そして、それらは今なお人類の生活に不可欠の技術として世界の広範な地域で受け継がれている。

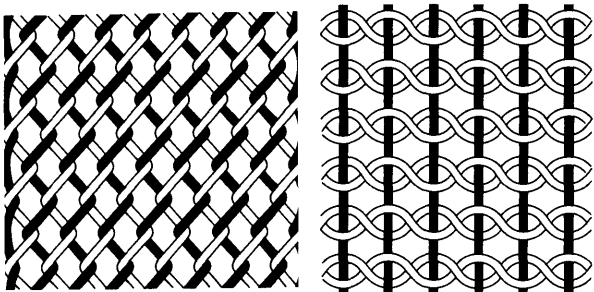
編物と織物とともに、糸、あるいは糸に類する線状物を素材としてつくられたものである。また、編物の基本組織は、交叉編組織、^{もじ}振り編組織、巻き編組織、^{りんな}輪奈編

組織に大別され（図1）、織物の基本組織は、平織組織、^{あやおり}綾織組織、^{しよすおり}縹子織組織、^{からみおり}搦織組織に大別される（図2）。このような編物と織物の組織を比較してみると、織物の基本組織のすべては編物の交叉編組織、あるいは搦織組織と類似している。したがって、編物と織物を区別することはかなり厄介であるが、筆者は織物を「糸、あるいは糸に類する線状物をタテ糸とヨコ糸とし、あらかじめ直線的に配置され、張力をそなえているタテ糸に対して、ヨコ糸を直線的に交叉させることによって組織されたもの」と定義している。たとえば、これまで日本の各地でつくられてきた^{わらじ}草鞋は、一般に編物として認知されており、草鞋づくりも、「草鞋を編む」と表現されてきたが、筆者は、さきの織物の定義にもとづき、草鞋を織物としてとらえている。それは草鞋が織物の一般的な概念とほど遠いものの、両足、あるいは草鞋台にかけた^{わら}藁縄（タテ糸）の端を片手で握って引っ張りながら、もう一方の手で藁（ヨコ糸）を直線的に交叉させてつくられている



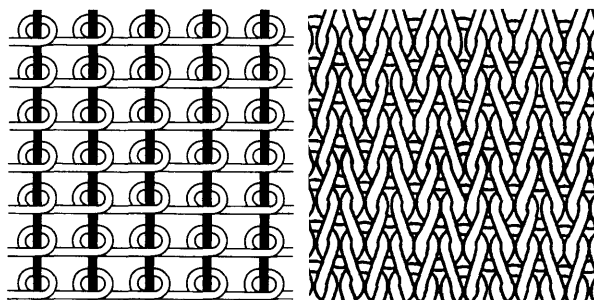
a - 交叉編組織

b - 交叉編組織



c - 振り編組織

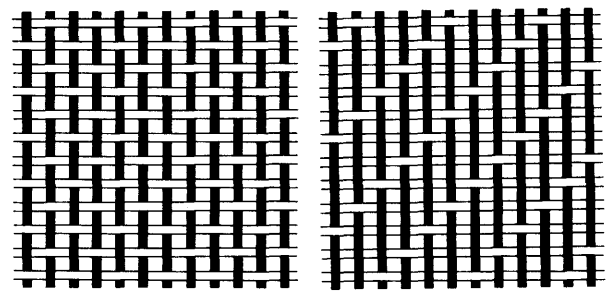
d - 振り編組織



e - 巻き編組織

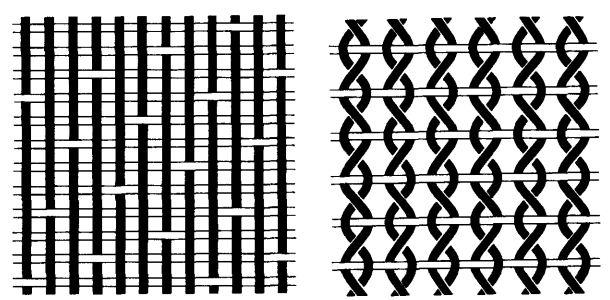
f - 輪奈編組織

図1 編物の基本組織



a - 平織組織

b - 綾織組織



c - 縹子織組織

d - 搦織組織

図2 織物の基本組織 ■ - タテ糸、□ - ヨコ糸

ことによっている [吉本 1987: 323-329]。

なお、織物のうちには、このような草鞋をはじめとするさまざまな種類が認められるが、いずれも発達史的には編物の延長線上に位置づけられる。すなわち、今日一般に編物と織物が区別されていることについては、張力のそなわったタテ糸を一括して開口させる綜統の発明によって、織物の生産性が飛躍的な向上をとげ、その結果として織物が編物から分離独立したと考えられる。

2. 北海道における編みと織りの痕跡

北海道とその周辺地域に居住してきたアイヌ民族のもとでつくられてきた編物と織物は、近・現代につくられた実物資料、ならびに18世紀半ば以降に描かれてきた絵画資料から、その概要を知ることができる。

編物は、おもに、ガマ、フトイ、オヒョウ、シナノキ、イラクサ、ブドウヅル、ツルウメモドキ、ハマニンニクなどを素材としてつくられている。そうした編物を用途別に見てみると、おもに編衣(ケラ)、幣冠(サバウンペ)、脛巾(ホシ)、死者用履物(ライクルケレ)などの衣類、ゴザ(トマ)、簾、帆(カヤ)などとしてもちいられてきたゴザ・簾類、ハマニンニクの茎でつくられたカゴ(テンキ)や背負い袋(サラニマ)をはじめとする容器類、背負い紐(タラ)や刀懸け紐(エムシアッ)をはじめとする紐類などに大別することができる。また、織物としては、オヒョウ、シナノキ、イラクサなどを繊維素材とした織物(アットゥシ)と、ブドウヅルをタテ糸とヨコ糸として織られた草履(ストゥケレ)が主要なものである。このうち、アットゥシには広幅の織物と細幅の織物があり、広幅の織物はおもに衣服(アットゥシ・アマテ、図版113)の布地としてもちいられてきた。また、細幅の織物はおもに帯(アネクッ、図版116)としてもちいられてきた。

一方、近世以前の編物や織物については、いずれも遺跡から検出された資料が知られているのみである。それらのうち編物については、縄文時代後期の小樽市忍路土場遺跡や斜里町朱円遺跡(図版165)、続縄文時代の大成町貝取澗2洞窟遺跡、トビニタイ文化期の羅臼町トビニタイ遺跡、擦文文化期の豊富町豊里遺跡や釧路市北斗遺跡、アイヌ文化期の千歳市美々8遺跡などをはじめとする遺跡から断片が出土している。そして、織物について

も擦文文化期の豊富町豊里遺跡や釧路市北斗遺跡をはじめとする遺跡から断片が出土しており、草履の遺物(図版142)は擦文文化期の札幌市K39遺跡から出土している。

また、編みや織りに関係する出土資料としては、糸や紐、糸を撚るためにもちいた紡錘車と見られる遺物、桁とコモ槌などの編具、緯打具や綜統などの織具と見られる遺物がある。このうち、糸や紐は縄文時代以降の各地の遺跡から数多く出土しており、紡錘車と見られる遺物は続縄文時代の札幌市K135遺跡、オホーツク文化期の網走市モヨロ貝塚、擦文文化期の栗沢町由良遺跡をはじめとする遺跡から数多く出土している。また、編具としてもちいられてきた桁やコモ槌は擦文文化期の札幌市K39遺跡や、千歳市ユカンボシC15遺跡の擦文文化期から中世アイヌ文化期の遺物包含層、近世の美々8遺跡をはじめとする遺跡から出土している。さらに、織具のうち、緯打具と見られる遺物は縄文時代晩期後半から続縄文時代前半の釧路市幣舞遺跡(図版161)、オホーツク文化期の網走市ニツ岩遺跡(図版160)、千歳市ユカンボシC15遺跡の擦文文化期から中世アイヌ文化期の遺物包含層および近世アイヌ文化期の遺物包含層、近世前半期の上ノ国町勝山館跡宮ノ沢川右岸地区などから出土している。そして、綜統と見られる遺物(図版143・144)は擦文文化期の常呂町栄浦第二遺跡から出土している。

3. 編みの痕跡に見る南からの文化伝播

北海道における編みの痕跡は、さきに述べているように縄文時代から近・現代に至るまで連続して認められる。ただし、それらの編みの組織の多くは振り編組織である。また、そのほかには交叉編組織と巻き編組織があり、輪奈編組織の編物については知られていない。

振り編組織と交叉編組織と巻き編組織に共通する編みの技術は、糸、あるいは糸に類する線状物を指で編んでいく方法であるが、振り編組織については、桁とコモ槌を使って編む方法もある。この桁とコモ槌による振り編みの技術は、指で編む技術とともに世界の広範な地域に分布しており、その歴史もかなり古い時代にまでさかのぼると見られる。北海道の出土遺物のうち、桁やコモ槌のもっとも古いものとしては、擦文文化期のものが知られているにすぎないが、縄文時代後期の小樽市忍路土場遺跡や斜里町朱円遺跡から出土している編物の断片は、

編組織がかなり高密度であることから編布といえるものであり、いずれも桁とコモ槌を使用した振り編みの布であった可能性が大きい。ちなみに、尾関清子氏の著述にもとづけば、忍路土場遺跡の編布断片の糸密度は、2本ごとに振りあわせた糸の間隔が3～5mmで、それらに直交する糸は1cmに8～10本、さらに朱円遺跡の断片では、2本ごとに振りあわせた糸の間隔が4～6mmで、それらに直交する糸は1cmに12本、糸の太さは0.6～0.7mmということである〔尾関 1996：45〕。また、忍路土場遺跡の振り編組織は、桁にかけたタテ糸を1本飛ばしに振りあわせた組織であったと見られ、この点に相違がなければ、その振り編組織は中世に時宗の僧が着用していた法衣（阿弥衣）の布地や、新潟県妻有地方で明治時代頃まで仕事着（図版171）の布素材としてつくられ、アングインやマギンなどの名で呼ばれていた編布の振り編組織（図3）と共通する。したがって、これらのことから北海道における桁とコモ槌を使った振り編みの技術は

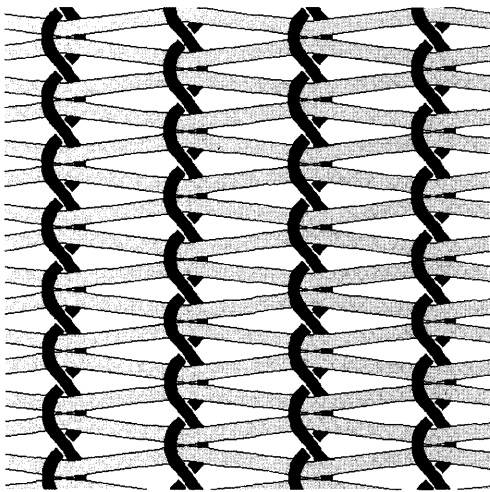


図3 アンギンやマギンの振り編組織

縄文時代に南から、すなわち本州から伝播したことが示唆される。

なお、桁とコモ槌を使った振り編みの技術は、現代のアイヌ民族にも継承されている。それらのうちでゴザは、いずれも目の粗いものであるが、その多くはタテ糸を1本飛ばしに振りあわせたものである（図版92）。しかし、さきのアングインやマギンと同様の編布をつくるための精密な振り編みの技術は伝えられておらず、民族資料のうちにも編布は見いだせない。ただし、擦文文化期、ならびにアイヌ文化期以降の千歳市美々8遺跡をはじめとす

る遺跡から出土した振り編み用の桁のうちには、タテ糸をかけ渡すために刻まれた溝の間隔が6～10mm程度のものが少なからず見いだされる。したがって、これらのことから、北海道では縄文時代にはじまる精密な振り編みの技術による編布が、近世のある時期までは一部の地域で連綿とつくりつづけられていたことが示唆される。

4. 織りの痕跡に見る南からの文化伝播

(1) 機織り文化

オヒョウ、シナノキ、イラクサなどを繊維素材としたアイヌ民族の織物の組織は平織組織であり、いずれの織物も腰機を使用して織られてきた。腰機はタテ糸の一方の端を腰当を介して織り手の腰で保持する織機であり、織りの技術に欠くことのできないタテ糸の張力は、織り手が身体を前後に傾けることによって加減される。このような腰機をともなった機織り技術は、日本の腰機（いざり機）をともなった機織り技術と同様に、中国起源の機織り文化の伝播によるものと見られる。そして、釧路市幣舞遺跡から緯打具と見られる鯨骨製の遺物が出土していることから、北海道の機織り文化は縄文時代晩期から続縄文時代前半頃までのあいだに、本州を経由してもたらされた可能性が考えられる。また、その当時の腰機は中国起源の東アジア系機織り文化圏における原初的な腰機と考えられる型式と同様のものではあったと見られる。そうした腰機の型式は、アイヌの広幅織物を織るためにもちいられている腰機と類似しているが、アイヌの腰機には櫛目状のおさ箄（図版112）がそなわっている点が唯一の相違点としてあげられる。また、東アジア系機織り文化圏は、中国、朝鮮半島、日本、および西南中国に隣接する東南アジア大陸部の山岳地域に展開しており、アイヌと同様の腰機は、ラオスやベトナムの北部山岳地域に住むクムヤプ・ノイなどの少数民族のもとにも見いだされる。なお、アイヌの腰機を構成する部品のうち、箄のみは日本語と共通するウォサの名で呼ばれており、このことからアイヌの腰機の箄は北海道に腰機がもたらされたのちに、本州からの影響で導入されたことがうかがわれる。

(2) タテ縞のアットゥシ

広幅織物のアットゥシには無地織物とタテ縞織物の2種類がある。ただし、タテ縞織物はおもに北海道アイヌ

のもとで織られてきたものであり、サハリン・アイヌや千島アイヌのもとでは、さほど多くは見いだせない。このタテ縞織物は小玉貞良にはじまる18世紀半ば以降のアイヌの風俗を描いた絵画資料のうちにも多々見いだされるが、その織り技術やデザインは、江戸時代の文化・文政年間頃に本州からの影響によって導入されたと推察される。その理由としては、まず、現存するタテ縞のアットゥシのほとんどすべてが、本州からもたらされたと思われる木綿糸をオヒョウやシナノキ、あるいはイラクサなどの糸のあいだに取り込んで織られていることがあげられる。さらに、文化・文政年間頃には、タテ縞織物の着物が江戸の粋を代表するファッションとして全国的に大流行していたことがあげられる。なお、そうしたタテ縞織物の流行の前段階には、日本の縞織物が南蛮貿易や紅毛貿易によってインドや東南アジアから縞織物が舶載されてきたことをきっかけとして本格的に織られるようになったという歴史的な経緯がある。すなわち、それ以前に縞織物は日本ではほとんど織られていなかったし、「縞」という名称も南蛮船や紅毛船によって南海の島々からもたらされた「島渡りの布」が語源となっている。したがって、今なおアイヌの人たちのあいだで織りつけられているタテ縞のアットゥシは、江戸時代に北海道に波及した江戸の粋の名残りとしてとらえることも可能である。

(3) 草履づくりの技術

ブドウツルを素材とした草履づくりは、日本各地の草履（草鞋）づくりと共通する織りの技術であり、その織り技術の分布地域は、さきの腰機をともなった中国起源の東アジア系機織り文化圏と重複している。したがって、北海道の草履づくりもまた、中国起源の技術が本州を経由して伝播したと考えられる。なお、日本の草履づくりは、両足にかけ渡したタテ糸となる藁縄の端を片方の手で握り、もう一方の手でヨコ糸となる藁を織り込んでいく方法と、両足のかわりに足形をした木製の台を使う方法があるが、アイヌにおいては台の使用は確認されておらず、草履づくりはもっぱら両足と手を使っておこなわれてきたと見られる。

(4) 擦文文化期の箱型開孔板綜統

擦文文化期の栄浦第二遺跡から出土した木製の炭化した綜統（図版143・144）は、これまで「擦文の箴」とし

て知られてきた [大貫 1995：500-508, 2000：127-137]。しかし、それは箴ではなく、開孔板綜統として位置づけられるものである。

開孔板綜統は平板な板にタテ糸をとおすための細長い線状の孔と丸い孔が交互に配置されたもので、わが国では新潟県妻有^{つまり}地方でバトウオビ、マギンオビなどの名で呼ばれてきた細幅織物を織るために使用されてきたことが知られている（図版152）。また、シベリアにおいてもタタール、ハンティ、マンシなどの民族のもとで使用されてきた [Попов 1955]。しかし、栄浦第二遺跡から出土した開孔板綜統は、蓋のない箱型を呈しており、底の部分に細長い線状の孔と丸い孔があげられている。このような特異な形状の箱型開孔板綜統については、これまで世界的にも類例が知られていなかったことから、その用途についても不明であった。しかし、最近になって、孔と孔のあいだの木質部表面にヨコ糸の打ち込みによってできたと見られる筋状の溝があったことと、この出土遺物と同様の箱型開孔板綜統（図版148）が新潟県妻有地方の津南町歴史民俗資料館に収蔵されていたこと、そしてさらに、旭川市博物館に収蔵されている豊富町豊里遺跡出土の遺物のうちに、栄浦第二遺跡出土の箱型開孔板綜統のタテ糸をとおす孔の間隔と、ほぼ一致するタテ糸密度のゴザ状織物の断片（図4）があったことなどの発見があいついだ。そうしたことから、栄浦第二遺跡から出土した箱型開孔板綜統と津南町歴史民俗資料館の箱型開孔板綜統は、孔にとおしたタテ糸の幅と同様の比較的幅の広いゴザ状織物を織るための特殊な開孔板綜統であることがあきらかになってきた。このことは箱型開孔

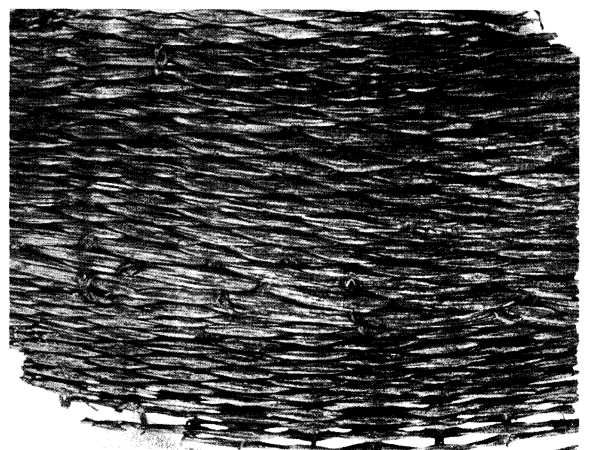


図4 豊富町豊里遺跡出土のゴザ状織物断片（旭川市博物館蔵）

板綜統が、バトウオビやマギンオビなどを織るための細幅織物専用の開孔板綜統とは異なり、ムシロやゴザを織るための筵機をはじめとする開孔棒綜統機の開孔棒綜統と同様の機能を持っていたことを意味している。また、そうした特殊な箱型開孔板綜統は、平板な板状の開孔板綜統から発展したものであり、開孔棒綜統が出現する前段階の過渡的な綜統の型式を今に伝えるものであると考えられる。さらに、開孔棒綜統機の分布は、さきの草履づくりの織りの技術と同様に腰機をともなった東アジア系機織り文化圏とはほぼ重複していることから、箱型開孔板綜統もまた中国起源の綜統と見られ、北海道へは本州を経由してもたらされたと推察される。

なお、開孔棒綜統機（筵機）は、アイヌ民族のもとには伝わっておらず、北海道へは日本人の移住にともなって持ち込まれている。また、栄浦第二遺跡出土の箱型開孔板綜統と豊里遺跡出土のゴザ状織物と関係する近・現代の実物資料については、これまでに知られていないが、北海道立文書館所蔵の『御用留混交集』の書面には、アットゥシのうちに「手羽」と称される粗末なムシロ状の織物があり、紋別から松前に出荷されていたことが記されている [本田 2002: 12]。したがって、この「手羽」についての記述からは、箱型開孔板綜統をともなった織機によるゴザ状織物の織り技術が、擦文文化期から19世紀半ば頃まで、少なくとも紋別周辺において継承されていたという可能性も浮かびあがってくる。

5. 織りの痕跡に見る北からの文化伝播

(1) 板箴

アイヌ民族の細幅織物を織るための腰機の多くには、タテ糸の上糸と下糸を分離するために、小さな板の上下にタテ糸をとおすための孔がつけられた板箴（クッウォサ、図版116）がもちいられてきた。このような板箴はシベリアのハンティとマンシ、カナダのクチンなどの民族のもとでもちいられている。アイヌの板箴は、おそらくはそれらの北方民族からの影響によるものと考えられる。

(2) ウリチの織具と昼夜織技法

シベリアの沿海州に住む少数民族ウリチのもとでは、腰機によってわが国では例を見ない輪状の細幅織物が織られてきた。また、それらの織物の組織は平織の変化組

織であるタテ畝組織で、異なった色糸を使ってタテ縞模様をあらわしており、タテ縞の一部にはタテ糸の上糸と下糸に異なった色糸を使用して表と裏の色を逆転させた、いわゆる昼夜織技法が認められる。このウリチと同様のタテ畝組織の細幅織物（図版117）や昼夜織技法をともなった細幅織物は、サハリン・アイヌのもとにも見いだされるが、それらはウリチと同様の独特の形状をした緯打具や綾棒（図版121）を使って織られていたことが現存する実物資料によってあきらかになっている。ただし、ペテルブルグのロシア科学アカデミー人類学民族学博物館に収蔵されているサハリン・アイヌの機織り途中の資料 [SPb-アイヌプロジェクト調査団 1998: 29] では、細幅織物の形状はウリチのような輪状ではなく、アイヌ本来の細幅織物と同様の矩形を呈している。このようなウリチとサハリン・アイヌに共通する昼夜織技法をともなった細幅織物について、大塚和義氏はサハリン・アイヌからウリチへの技術移転であるとの見解を提起しておられる [大塚 2003: 111-113]。しかし、筆者はウリチからサハリン・アイヌへの技術移転であったと考えている。それは昼夜織技法や独特の形状の緯打具と綾棒が北海道アイヌや千島アイヌのもとにはほとんど存在していないこととともに、ポポフ [Попов 1955] によってウリチと共通する織機がシベリアのアルタイ（テレウト）とショルのもとにあり、さらに同様の織機がロシア人のもとでも使われてきたことがあきらかにされていることによっている。

(3) アイヌの腰機とシベリアの地機との類似

アイヌの腰機は、すでに述べているように本州を経由して伝播したと考えられるが、その腰機の先端部から綜統に至る部分までの構造と部品の形状、とくに箴が開口保持棒とタテ糸の先端部とのあいだに組み込まれている位置と、2枚の板で構成された開口保持具の形状については、シベリアのブリヤート人やタタール人のもとで使用されてきた地機と酷似している（図5）。ただし、腰機が腰当を介してタテ糸の一方を保持する型式の織機であるのに対して、地機は地面に設置した杭や横木にタテ糸を張り渡した織機であり、腰機と地機の基本構造はまったく異なる。さらに、腰機では一般に綜統を動かしてタテ糸を開口させるのに対して、ブリヤートやタタールの地機は綜統が固定されており、開口保持具を前後に動か

してタテ糸の開口と逆開口がおこなわれている。また、腰機と地機は分布も異なっており、腰機が環太平洋とその周縁地域に分布しているのに対して、地機はインド、アラブを中心とする地域に分布しており、シベリアもそのうちに包括される。したがって、ブリヤートやタタールの地機をともなった織りの技術と、アイヌの腰機をともなった織りの技術とのあいだに影響関係はありえないと考えられるが、部分的な構造と部品の形状が酷似していることは、過去に相互の民族のあいだに直接、あるいは間接的になんらかの接触があったことが推察される。

6. 編みと織りの痕跡に見る糸づくり技術の消滅

縄文時代以降、現代に至るまでのあいだに北海道とその周辺地域では、南から、そして北からの文化伝播によって、さまざまな編物や織物がつくられてきた。そうした過去から現代に至る編みと織りの痕跡をたどってみると、編布、ゴザ状織物、紡錐車、箱型開孔板綜統などのように、その痕跡が考古遺物のうちにのみ見いだされ、生活文化の近代化以前に技術が消滅したと見られるものも少なからず存在している。それらの技術の消滅については、もとよりそれぞれに理由があつてのことと考えられるが、筆者がとりわけ大きな問題としてとらえているのは、糸づくりの技術、すなわち糸を績む技術と糸を撚る技術の消滅である。

縄文時代から現代まで北海道を中心としておこなわれ

てきた編みや織りの糸素材には、植物の準長繊維がもちいられてきた。それらの繊維を使用した糸づくりは、縄文時代から擦文文化期までは、端を細かくほぐした繊維を撚りあわせて糸を績み、さらに、績んだ糸に紡錐を使って強い撚りをかけ、かなり細い糸をつくっていたことや、精緻な糸密度の編布や織布をつくっていたことが出土遺物によってあきらかになっている。しかし、アイヌ文化期以降には紡錐車の出土例の報告はなく、現存するアットゥシのタテ糸やヨコ糸にも強い撚りをかけた糸や細い糸を使用した例は見いだせない。また、糸密度の精緻なアットゥシも知られておらず、ほとんどのアットゥシにはタテ糸やヨコ糸に績んだ糸ではなく、繊維の端を結びあわせることによって長くした糸が使われている。

したがって、これらのことからアイヌ文化期以降の糸づくりの工程から、績む、撚るという基本的な技術がほぼ消滅したことがうかがわれる。このような例は世界的にもほとんど例のないことであり、それは世界各地の編みや織りの常識をくつがえすほどの非常事態といっても過言ではない。績む、そして、撚るという糸づくりの技術は、とりわけ肌にやさしい衣料素材としての布づくりには欠くことのできない技術である。そうした技術が北海道から消滅したという要因の一つとして、1669年のシャクシャインの戦い以後、松前藩によるアイヌ民族統治政策の強化があげられる。

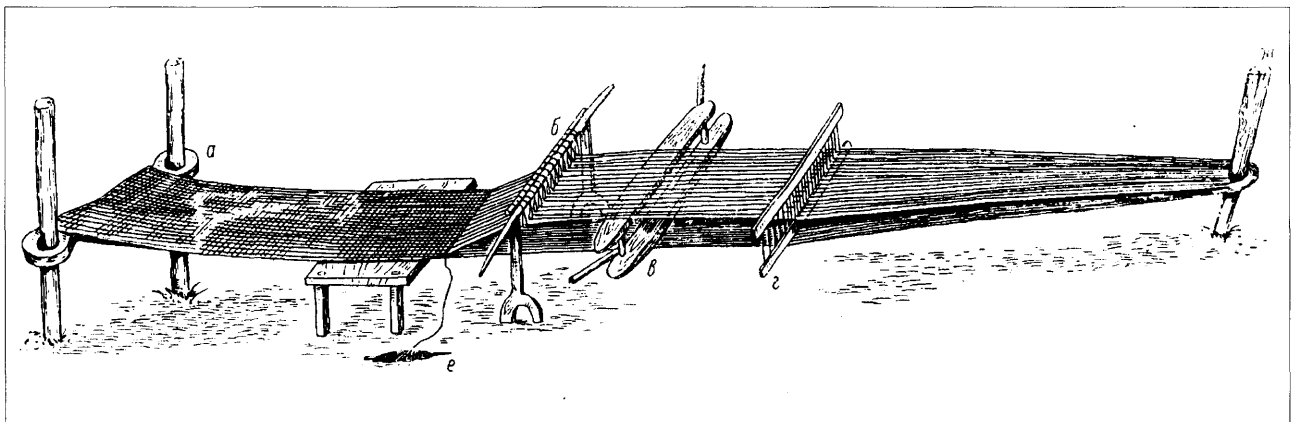


図5 ブリヤートの地機 (Попов, А. А. 1955 'Плетение и ткачество у народов Сибири в XIX и первой четверти XX столетия', in "Сборник Музея Антропологии и Этнографии" т. XVI より)